

東京芸術劇場 海外オーケストラシリーズ

バイエルン放送交響楽団 パリ管弦楽団

独仏2大管弦楽団が競う マーラーの交響曲

ドイツのバイエルン放送交響楽団、
フランスのパリ管弦楽団——
欧州2大オケが再び東京で激突！
クライマックスは東京芸術劇場でのマーラー対決。



マリス・ヤンソンス



ダニエル・ハーディング

© Orchestre de Paris William Beaucardet

よみがえる2年前のあの感動的な名演

マリス・ヤンソンスとバイエルン放送響によるマーラーの交響曲と言えば、2年前の11月に彼らが東京で演奏した「第9番」の快演を思い出す方も多だろう。そして全曲の最後、安息に包まれて音楽が消えて行ったあと、満席のホール内には息づかいすら聞こえず、やがて指揮者が僅かに身体を動かし、弦楽器奏者が高くあげたままの弓を静かに下ろし終ると、会場全体から微かな吐息が漏れ、それから拍手がゆっくりと巻き起こり、急激に熱狂的に高潮し、ブラヴォーの歓声が交じっていったあの瞬間をも——。彼らの演奏は、それほどまでに感動的だったのである。

その「9番」の演奏では、ヤンソンスの指揮は、温かさに満ちていた。陰翳は濃いが、決して深い憂鬱に陥らない。荒々しくても、マーラーの演奏にありがちな騒がしさはない。バイエルン放送響の演奏も、重厚壮大かつ均整の取れた響きの美しさなど、さすが世界屈指の楽団らしい風格を備えていたのであった。

一方、ダニエル・ハーディングとパリ管弦楽団が2年前の来日で演奏したマーラーの交響曲は、「第5番」だった。それはバイエルン放送響とはまったく対照的な、開放的で輝かしく、闊達で自由な感興にあふれた演奏だった。別の意味で、見事な演奏だったのである。激烈な大スペクタクル、沸騰し続ける情熱、プリリアントな響きの金管群、艶やかな音色の弦楽器群——。フランス第一の実力を誇るパリ管は、ハーディングの指揮で、久しぶりにその本来の特徴たる華麗な演奏を聴かせたのであった。

ミステリアスな「夜の歌」、意気軒昂な「巨人」

これら名指揮者と名門管弦楽団による各々のマーラーが、再びこの秋に聴けるのは、大いなる喜びだ。演奏が予定されているのは、ヤンソンスとバイエルン放送響が「第7番《夜の歌》」、ハーディングとパリ管が「第1番《巨人》」である。

「7番」は、不思議な交響曲だ。「夜の歌」とは、もともとマーラーが第2楽章と第4楽章につけた題名である。そして第1楽章から第4楽章までは、曲想の動きは多様で多彩であるものの、非常にミステリアスな、時には怪奇な雰囲気さえ感じさせる。ところが、それがなんと最後の第5楽章に至って、いきなり異様な躁の状態になる。この曲が謎めいていると言われる理由の一つ

には、このコントラストがあまりに強烈で、しかもその両者がどうも結びつきにくい……ということもあるだろう。

しかし、この第4楽章までの不気味な雰囲気はまたなんとも魅力たっぷり、マーラー・ファンの中には、彼の交響曲ではこれが最も面白い、という人も少なくないのだ(私もその一人である)。円熟の域に達した名匠ヤンソンスがこの不思議な大曲をどう構築してくれるか。ドイツの名門バイエルン放送響は陰翳の濃い音色が得意のオケだから、さぞかし聴きものだろうと思う。

一方、「第1交響曲《巨人》」は、マーラーの若書きの作品ゆえ、もっと明るく、生き生きした躍動にあふれ、確信に満ちている。現在一般に演奏されている「4楽章版」の中で、特に後半の二つの楽章には、いかにもマーラーらしいユニークな個性が聴かれるだろう。第3楽章は葬送行進曲調、第4楽章は激烈な感情の爆発だ。その大詰の頂点は、まさに熱狂の坩堝である。

ハーディングのつくるクライマックスは意外にあっさりしているという傾向があるが、それは彼がロマン派の音楽にはあまり無条件に「のめり込まない」タイプの指揮者であるせいかもしれない。だが、名門パリ管の多彩な音色と、輝かしいパワーに満ちた音色は、特にこの後半の二つの楽章において炸裂するであろう。

この秋、ドイツとフランスの名門オーケストラが真髄を競うマーラーの交響曲。両者の演奏会を併せ聴いて、決して損をした気持にはならないと思う。

文：東条碩夫(音楽評論家)

バイエルン放送交響楽団
11月22日(木) 19:00開演 コンサートホール
指揮：マリス・ヤンソンス
管弦楽：バイエルン放送交響楽団
曲目：マーラー／交響曲第7番 ホ短調「夜の歌」

詳細はHPへ

パリ管弦楽団
12月16日(日) 15:00開演 コンサートホール
指揮：ダニエル・ハーディング
ヴァイオリン：イザベル・ファウスト
管弦楽：パリ管弦楽団
曲目：ベルク／ヴァイオリン協奏曲「ある天使の思い出に」
マーラー／交響曲第1番 二長調「巨人」

詳細はHPへ



イザベル・ファウスト

芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー アトリウムコンサート

無料

9月~12月 アトリウム(1階)

詳細はHPへ



ランチタイムの気分転換に芸劇へ!

音楽に合わせて身体を動かすのもよし、おにぎりや食後のコーヒーを片手にお友達とお話ししながらもよし、プロに囲まれて演奏するアカデミー生の勇姿を応援するもよし。音楽と、各々の楽しみ方で生まれる笑顔が、開放的なアトリウム中に広がる。そのような時間を、平日のランチタイムに若手演奏家育成プロジェクト「芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー」がお届けします。演

奏はアカデミーに在籍する若き才能のあるアカデミー生と、演奏指導を行う日本随一のプロフェッショナル吹奏楽団、東京佼成ウインドオーケストラの楽団員によるアンサンブル。木管楽器や金管楽器による温もりのある音色は、音楽の広がりや奥深さへ誘ってくれます。この機会に是非、生演奏の魅力に触れてみませんか?

9月19日(水) / 10月 2日(火) / 10月16日(火) / 10月30日(火)
11月28日(水) / 12月 4日(火) / 12月12日(水) / 12月20日(木)
各回12:15~12:45

 芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー
@geigeki.wind.orchestra.academy

東京芸術劇場 Presents ブラスウィーク2018

9月9日(日)・30日(日)・10月6日(土)・11月29日(木) コンサートホール

3人の名匠が創出するトップ楽団の個性的妙演

最高クラスの吹奏楽団の持ち味を続けて堪能できる、秋恒例の「ブラスウィーク」。今年は、西の注目株・広島ウインドオーケストラが初登場を果たす。

まずは東京吹奏楽団。1963年からプロ活動を続ける老舗の彼らは、「親しみやすく、愛される吹奏楽団」のモットーに沿った演奏で、吹奏楽の醍醐味をストレートに伝えてくれる。「創立55周年&汐澤安彦傘寿(80歳)記念」と銘打った今回は、かつて常任指揮者(現・名誉指揮者)を務めた斯界の重鎮・汐澤の熟達のタクトが必見必聴。「東吹スペシャル」版の「ラプソディ・イン・ブルー」，“汐澤安彦監修”の「展覧会の絵」など、独自のクラシック中心の演目も魅力十分だ。

東京佼成ウインドオーケストラは、日本の看板的存在。吹奏楽芸術の究極ともいえるハイグレードの演奏は、世界で賞賛されている。こちらは、クラシック界の重鎮・秋山和慶の指揮で、リード、ヴァン・デル・ロースト、クレストン、長生淳のオリジナル曲を主軸としたプログラムを披露する。同団の本間千也がソロを吹くジョリヴェのトランペット協奏曲第2番の異空間的なサウンドも大注目。管楽器のブレンドの妙味を存分に満喫できる公演だ。

最後の広島ウインドオーケストラは、創立25周年を迎えた中国地方の雄。2011年音楽監督に就任した下野竜也のもと、“邦人作品”“芸術性を追求した吹奏楽”を核とした意欲的なプログラミングで注目を集め、昨年末のシカゴ公演でも成功を収めた。今回は、大胡恵、西村朗の二作の初演が大胆かつ意義深く、大人気の高昌帥作品や、世界的名手・外園祥一郎がソロを吹く長生淳のユーフォニアム協奏曲も実に楽しみ。この機会に、しなやかで美しい唯一無二のサウンドをぜひ体感したい。

文：柴田克彦(音楽評論家)



9月30日(日) 詳細はP14へ
14:00開演
東京吹奏楽団
指揮: 汐澤安彦

10月6日(土) 詳細はHPへ
14:00開演
東京佼成ウインドオーケストラ
指揮: 秋山和慶

11月29日(木) 詳細はHPへ
19:00開演
広島ウインドオーケストラ
指揮: 下野竜也

9月9日(日) 12:45開演 詳細はP13へ
バンドクリニック
『中・高生のための楽しい吹奏楽』